

日本子ども社会学会 学会ニュース

第 35 号 (2019/12/15)

日本子ども社会学会 事務局・広報委員会
〒152-0004 東京都目黒区鷹番三丁目 6 番 1 号 内外出版株式会社
Fax : 03-3712-3130 E-mail : jscs@naigai-group.co.jp

目次

会長就任にあたって……………1	第 26 回大会報告……………3
会長任期を終えて……………2	テーマセッション報告……………4
第 27 回大会開催校から……………2	各委員会から……………7

会長就任にあたって

山田浩之 (広島大学)

2019 年度からの 2 年間、本学会の会長をお引き受けすることになりました。微力ながら本学会のますますの発展に少しでも貢献できればと考えております。

日本子ども社会学会は学際的な学会であり、多様な研究領域、さまざまな所属の方々から構成されています。研究や実践などの活動でさまざまな背景を持っておられる方との交流は刺激的であり、私自身、本学会の多くの場面で子ども研究に対する新たな示唆を得てきました。こうした有意義な場をできるだけ多くの人たちと共有したいと考えています。

また、本学会も創立から 25 周年を越え、30 周年も近づいてまいりました。学会として成熟し、さらに活発な活動が求められるようになっていきます。今後の学会活動を支えるのは、これまで学会を牽引して下さってきた世代の方々に加え、若い世代の研究者や実践者、また大学院生であることは間違いありません。私の役割はすべての世代の方々と繋ぎ、これまでの研究と実践での資産を若い会員たちに継承することだと考えています。そこで、本学会の多様性を活かしながら、会員のみならずすべてが活躍できる場を学会の中に作り出せるようにしたいと思います。

これまでの 4 年間は、永井前会長のもとで事務局長として学会の運営に関わってきました。学会事務を内外出版に委託したことで、事務的な仕事は大きく軽減されました。しかしながら、学会運営には経済的な問題を始め、多くの課題が残されています。中坪史典事務局長、また事務局の方々に助けていただきながら、残された課題に取り組んでいきたいと思っております。また、運営に関しましては、会員のみならず

ら忌憚のないご意見をいただきければ幸いです。これからの2年間、よろしくお願いします。

会長任期を終えて

永井 聖二（東京成徳大学）

本年6月の大会をもって、2期4年間の会長任期を終えることになりました。武内清元会長のもとでの事務局長としての4年間を含めて、至らぬことばかりではありましたが、皆様のおかげをもちましてここまで進んでこられましたことを深く感謝申し上げます。

この間を振り返って考えることは、やはりこの学会の存在の意味はどこにあるだろうか、ということです。もちろん、それは会員によってさまざまであってよいわけですし、若手の研究者にとって多様な研究発表の場が求められている今日の状況を考慮することも必要でしょう。

しかし一方で、この学会の魅力は、やはりその学際性にあることも否定できないように思います。学際的な研究というのが、言うは易く行うは難しいものではあることはご承知の通りですが、研究への学際的な刺激を大切にしたいというのが、私の考えでした。この点からすると、近年、心理学や児童文化を中心的な研究領域とする会員が減少していることは残念で、何らかの施策が求められているように思います。

また、運営上の問題としては、かつてのように特定の大学院に所属する院生が献身的に学会事務を担うということが望むべくもなく、またそうあるべきでもないとするならば、外部委託を検討せざるを得ないのですが、この学会の財政上の制約から、それを容易に進めることはできないのが現状です。

この4年間は、事務局長の山田浩之先生をはじめ西本佳代、尾川満宏両事務局長に結局多くのご負担をかけることになってしまいました。感謝とともに申し訳なさを感じています。本学会の現状は、共同体的な運営には規模が過大で、外部委託には規模が足りないということになりますが、この点について何とか解決策を見出して、学会の安定的な運営を確保する必要があります。

こうした課題は今期以降に引き継がれることになりますが、幸いにも近年では大会時の発表数も増加しており、紀要も編集委員会のご努力で刷新されつつあります。今期の山田会長のもとで、若い世代の会員諸氏の活動がさらに盛んになり、この学会がますます発展することを願っています。

第27回大会開催校から

第27回大会実行委員長：尾場友和（大阪商業大学）

日本子ども社会学会・第27回大会（2020年6月13(土)・14(日)）の実行委員会を代表し、ご挨拶を申し上げます。

大会開催校となる大阪商業大学は、大阪市の東に隣接する東大阪市に位置し、経済・経営系学部を中心とする3学部、約4,500人の学生を擁する中規模大学であり、今年で大学創立70周年を迎えました。

東大阪と申しますと、高い技術力を持った「町工場の集積地」「モノづくりのまち」として全国的に知られていますが、「学術・文化の街」という顔もあわせもっています。大学から徒歩圏内に、司馬遼太郎

氏の住まいを改装した司馬遼太郎記念館や田辺聖子文学記念館（大阪樟蔭女子大学）があり、市内には本学を含め 4 つの大学が集まっています。少し足を伸ばせば、今年、大いに盛り上がったラグビーワールドカップの会場にもなった高校ラグビーの聖地「花園ラグビー場」に行くことができます。さらに、本学は交通至便な場所に位置しますので、笑いのメッカ道頓堀や難波、日本一の高さを誇る「あべのハルカス」、昭和レトロな雰囲気を残す天王寺界限（坂田三吉や通天閣）など、いかにもオオサカ（大阪ミナミ）と言える観光エリアへ 20 分程度でアクセスできます。

このように交通の便がよい場所にありますので学会開催には便利なのですが、本学は経済・経営系学部を主とする大学であることから、本学会の会員は教職課程の教員である私（尾場）と佐野茂会員のみであり、運営スタッフの数の面で心許ない状況にあります。そこで大会運営にあたっては、安東由則会員（武庫川女子大学）、久保田真功会員（関西学院大学）、池田曜子会員（流通科学大学）にも大会実行委員をお願いし、様々なサポートを頂戴する予定にしております。

第 26 回大会のような立派なものではありませんが、精一杯運営に努めてまいりますので、皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

第 26 回大会報告

第 26 回大会実行委員長：石黒万里子（東京成徳大学）

涙の不参集となりました第 25 回大会以降、ひたすら大会当日の天候を心配し続ける 1 年となりました。2 年連続の不参集だけは避けたいと祈る日々でしたが、迎えた 6 月 29 日・30 日は、梅雨時らしいあいにくの雨模様ながら、ご参加のみなさまのお顔を直接拝見することができ、心の底から安堵いたしました。

発表件数 43 件（プログラム発表後のキャンセル 3 件）、テーマセッション 2 件、ラウンドテーブル 4 件、シンポジウム 1 件、参加者 173 名（ご招待 10 名含む）、懇親会参加者 68 名の第 26 回大会でした。終盤は雨足が強まりましたが、最後までご参加いただきましたみなさまに感謝申し上げます。

大会準備から開催、そして事後対応にいたるまで、多くの方々から温かな応援のおことばやご支援を賜り、とても心強く、励まされる思いでした。おひとりおひとりお名前を挙げることができず申し訳ございませんが、大会時の事務局長であり新会長となられた山田浩之先生はじめ、西本佳代先生、尾川満宏先生、事務局のみなさま、そしてメディア活用委員会の藤田由美子先生、佐野秀行先生の細やかなお力添えがなければ、とても大会の開催はかないませんでした。改めまして厚くお礼申し上げます。そして、第 25 回大会実行委員長の安東由則先生には、いつも力強い激励をいただきました。お心遣いに報いるためにも第 26 回大会を成功させなければいけないと責任を感じておりましたが、大会時にはお褒めのおことばを頂戴し、なんとかご恩に報いることができたかと、涙の出る思いでした。

また私ども実行委員会といたしましては、前学会長永井聖二先生のご退任を、本学で迎えられましたのは、感慨深いものがありました。私自身は、優秀なスタッフと学生に恵まれた、幸せな実行委員長でした。なお、大会時に配布させていただきました東京成徳大学の名前入りバッグをお持ちの方が、ご近所の十條銀座に大勢お越しただけだそうで、商店街から御礼をいただき、思いがけない嬉しいできごとでした。

ここで、忘れ物のお知らせをさせていただきます。黄緑色の表紙のファイル（6月28日6206教室）、赤ペン（6月29日6203教室発表者机上）、黒い表紙のノート（6月30日6202教室）を、お預かりしております。お心当たりの方は、大会実行委員会(kosha26@tsu.ac.jp)までご連絡ください。2020年3月末までにご連絡が無い場合は、処分させていただきます。

拙い大会運営ではございましたが、大阪商業大学での第27回大会へとなんとか襷をつなげましたことを、心より嬉しく存じます。重ねて、実行委員会を代表いたしまして、みなさまに御礼申し上げます。ありがとうございました。

テーマセッション報告

テーマセッションⅠ 子ども社会をフィールドワークする

現在、人文社会科学の多領域において「フィールドワーク」を調査の手法とした研究が盛んに行われている。各学問領域によってその定義は若干異なり、また時代とともに変遷を経ているものの、質的調査法としてのフィールドワークは、調査者自らが対象とする社会で参与観察を行い、人々の生活や視点から対象を理解しようとするスタンスは共有している。しかし、フィールドワークは調査者と対象者の交渉のうえに実現されるため、その手続きや具体的な方法は一般化しにくく、「入って見ないとわからない」ことも多い。これは想定しなかった発見を導く一方で、調査への期待や倫理観に関する調査者とフィールドの人々とのズレを生じさせることにもなる。ことに、子どもを対象としたフィールドワークでは、大人である調査者が、対象とする「子ども」をどのように捉え、どのように向き合い、どのような関係の下で調査を行うかは、調査の目的や各調査者の意向、あるいはその時々偶発性に寄るところが大きい。そうした調査者の関わりや立ち位置が調査の成果に少なからず影響を及ぼすのも事実である。こうしたフィールドワークの可能性と難しさに関する議論の上にフィールドワークを発展させるためには、各調査者がフィールドワークをどのように実施しているのかという経験知を蓄積させ、その手続きと方法に関する議論を深めることが重要と考え、本テーマセッションを開催した。具体的には各報告者の、調査者の動機から導かれるファーストコンタクトの手続き、対象とする子どもとの関係の変遷、調査者（の存在と調査すること）が対象者に与える影響についての自覚、といった観点から、各々の経験を共有した。

第一報告の金南咲季氏は、日本のコリア系外国人学校とその周辺の多文化混交地域でのフィールドワークの経験に基づいて、主に「対象の設定」について議論した。社会調査では課題設定をする際に往々にして、例えば「在日コリアン」や「被差別部落」、「外国人児童生徒」といった、カテゴリーやそこに横たわる「社会問題」を入り口（ファーストコンタクト）としがちであるが、現場の人々はこの「対象とされること」ひいては「カテゴリー化されること」に違和感や拒否感を感じることも少なくない。ことに子どもたちにとっては「当たり前の日常」が「勝手に」カテゴリー化されるのである。金南氏は、自らのフィールドとの出会いがその人々に付されたカテゴリーとは異なる偶発的でパーソナルなものであったことから、反ってこの「カテゴリー化」の暴力性に気づき、「出会い方」が研究に及ぼす影響を注視する。また一方で、フィールドワークで得られた成果を論文にする過程においては、フィールドで批判的に問われた「カテゴリー化」が「学問的関心」や「研究の意義」という公的議論において再び立ち現れること

から、広義の研究倫理について問題提議した。

第二報告の山口季音氏は、児童養護施設でのフィールドワーク経験に基づいて、子どもと調査者の「関係の構築」について議論した。生活面や心理面で支援を要する子どもたちへの「ケア」を目的とし、そこで生活する子どもたちにとっては私的な場である施設において、調査者はどのような存在として子どもたちと関わることができるか（関わるべきか）というのは往々にして調査者が自問するところである。山口氏自身もそのような懸念とともに最初は子どもたちとの関係を模索していたが、そこに存在し続けることを通して、子どもたちが調査者をどのように受け入れているかに自覚的になった。子どもたちは大人が想定する「関係」とは別の視点から、時に即興的に、偶発的に、そこにいる「一大人」（「調査者」という認識があるかどうか、子どもによってもその時々によっても異なる）との関係を築く。山口氏は、こうした「子どもとの関係形成のプロセス」、つまりは子どもと調査者自身の相互作用の過程を記述することでデータに厚みを与えるのではないかと提案した。さらに、このプロセスそのものが子ども社会の独自性を示す可能性があることを提示した。

第三報告の針塚瑞樹氏は、インドのストリートチルドレンを擁護する NGO や路上生活経験のある若者を対象とした長期的フィールドワークの経験から、フィールドワークの相互行為的実践について議論した。かつてストリートチルドレンであった現若者たちを、彼らの子ども期から現在まで継続的に追うことを通じて、彼らの語りの変化や、彼らが自らの子ども期を大人になってからどのように解釈するかを知ることができる。その語りの中には調査者が登場することも往々にしてあり、彼らの中で調査者との関係がどのように消化され、また調査者が調査対象者の人生の選択決定に少なからず影響を及ぼしていることに気づかされる。この経験から、針塚氏は、フィールドワークは調査対象者と調査者双方にとっての社会関係構築のプロセスであり、調査者も調査対象者にとって準拠集団となるコミュニティにある部分組み込まれていることを自覚し、調査者をもフィールドの一構成員に含めたかたちで記述分析することの有効性を説いた。

以上 3 つの報告からは、1) 調査のきっかけとなる偶発的でパーソナルなフィールドとの出会い方が、大義名分としての研究動機とは異なる重要性を有するということ、2) フィールドワークで起こる「偶発性」には「子ども」を知る鍵があること、3) フィールドワークにおける個別性（個人性）に真摯になればなるほど浮上する研究倫理の問題、が明らかとなった。これに対してフロアからも活発な質問やコメントが提示され、主に研究倫理の問題やフィールドワークの記述の在り方に関する議論がなされた。

「子ども」を他者との関係性の中で捉えるにあたっては、調査者自身もその関係性の中に存在することを自覚し、相互行為的実践のプロセスを記述することによって「子ども社会」を知覚しうる可能性があることを、本テーマセッションで提案できたものとする。

(南出和余／神戸女学院大学)

テーマセッションⅡ 保育者養成と子ども理解

「子ども理解」という概念は、現代の保育者養成において重要な規範として機能している。だが、その概念が自明視されるほど、それが実際に保育者養成においてどう理解・使用され、機能しているのかは不可視となる。学校種、学問分野、養成と研修との間などで、その位置や機能は異なるかもしれない。子ども理解という概念を様々な立場から問い直すことは、保育者養成の在り方を考える上で、重要な試みで

ある。そこで本セッションでは、子ども理解をキーワードとして、本学会の持つ学際性を活かしながら、保育者養成の課題や在り方について4つの報告を基に議論を行った。

第1報告者の片山悠樹氏（愛知教育大学）からは、「『子ども理解』と保育者としてのキャリア展望」と題して、教員養成における「児童生徒理解」との比較から保育者養成における「子ども理解」の特徴と機能が報告された。教員養成・保育者養成の教科書を分析することを通して、教員養成では子どもを理解可能な存在として客観的理解（科学的理解）によって理解して自己理解につなげる特徴があるのに対して、保育者養成では子どもを理解困難な存在として客観的理解よりも共感的に理解しようとする傾向があり、理解困難であるからこそ記録と省察を通して保育者の自己理解につなげる特徴があることを明らかとした。また、専門学校でのインタビュー調査を基に「子ども理解」が保育者養成における専門性の涵養に関わる要素となることを示した。

第2報告者の山瀬範子（國學院大學・研究交流委員会委員）からは、「大学における保育者養成と子ども理解」と題して、保育者養成に用いられるテキストにおいて「子ども理解」が幼児教育・保育を学ぶ学生に対してどのような形で提示されているのかが報告された。大学における幼稚園教員の教職課程コアカリキュラムや保育士養成課程においてどのような科目で「子ども理解」が扱われているのかを明らかにした上で、保育内容総論のテキストの中で「子ども理解」がどのように保育学生に提示されているかを示した。

第3報告者の都島梨紗氏（岡山県立大学）と上地香杜氏（名古屋大学大学院）からは、「専門学校における実習指導ーリアリティ・ショックの観点からー」と題して、保育系専門学校におけるアンケート調査データを基にリアリティ・ショックの観点から専門学校における実習指導の役割について報告がなされた。実習先と学生の「相性」や職場環境の「働きやすさ」、実習担当者の「工夫」といったような環境的側面には主たる関心が向けられていない。また、保育者養成の取り組みによってリアリティ・ショックを軽減する可能性があるのではないかという関心から、保育系専門学校の学生・その教員・実習園の実習指導担当者からのインタビューデータを軸として、実習に対するそれぞれの意味づけの整理が行われた。実習を通して学生は子どもとの関わり方のリアリティを学び、実習と学校の授業を関連付けて理解したり、日常の行動を変容させるなど、実習による保育意識の変容が確認された。養成校教員では、内省したり専門知識を重視する指導を行いながら、マッチング（実習先として、就職先として）を意識したり、実習を通して学生理解を深めている様子が見られた。実習園の実習指導担当者においては、学ぶ専門知識を重視しながら、少人数保育によるOJTを通して学びをスムーズに帰結させたり、積極的にボランティア・実習を受け入れることを通して保育士確保を試みている姿が報告された。

第4報告者の神長美津子氏（國學院大學）からは、「現職研修における子ども理解」と題して、現職研修における「子ども理解」の位置づけについて経験年数による研修ニーズの違いを基に保育者としての自己研鑽の場の作りについて報告がなされた。「保育は子ども理解に始まり子ども理解に終わる」と言われるように子どもを理解する力は保育者としての資質能力の核であり基礎にある。子ども理解の視点から自らの保育者としての関わりを振り返ることができるため、「子ども理解」の研修は主に初任者研修で取り上げられることが多い。ここでは、指導者の理解を伝えることではなく、受講者ひとりひとりが自分の子ども理解をどう引き出すことができるかが重要である。経験年数5年前後のミドル研修でも子ども理解が取り上げられることがあるが、取り上げ方が異なり、説得力を持って一人一人が子ども理解を語り、それをもとに子ども一人一人を活かすクラス経営を学んだりすることになる。

これらの報告に対して、ジェンダーへの理解の視点が子ども理解に含まれているのか、子ども理解はそもそもどこから始まったのか、などの質問が寄せられた。質問を基にした議論においては、片山氏からは、子ども理解と児童理解の差異が保育者と小学校教員の話のかみ合わなさの要因の一つになっている可能性が示唆され、また、神長氏からは、生活時間の違いからどのように意図を持つかが異なるために乳児と幼児では子ども理解が異なる可能性も指摘された。最後に司会者の東野充成氏から子ども理解の内包する意味を明らかにする必要性が指摘され、「子どもが好き」から子ども理解へと反転する過程について注目する必要があるのではないかとということが述べられた。

(山瀬範子／國學院大學)

各委員会から

学会賞選考委員会から

平成 30 年については、学会賞の対象となる研究活動はなかった。

平成 31 年度については、2019 年 10 月末に推薦候補の募集を締め切り、次年度総会に向けて審査中である。

なお、役員改選により、平成 31 年度からの選考委員は、青井倫子（愛媛大学）、西本裕輝（琉球大学）、山縣文治（関西大学）が務めている。

(学会賞選考委員会委員長／山縣文治)

紀要編集委員会から

紀要編集委員会の組織改編について

2019 年 6 月 30 日の理事会で、紀要編集委員会の組織改編が決定され、今学会年度から新体制のもとで紀要の編集と投稿論文の査読が行われております。

従来、紀要編集委員会は 20 名以上の紀要編集委員で構成されていましたが、新体制では、10 名程度の「紀要編集委員」と 20 名程度の「専門査読委員」で構成されることになりました。紀要編集委員は、編集会議への出席や投稿論文の採否も含めて紀要編集全般に関わる業務を担当します。それに対して専門査読委員は、編集会議には出席せず、投稿論文の採否にも関与せず、編集会議で割り当てられた投稿論文の査読のみを行います。したがって、専門査読委員は紀要に投稿論文を投稿することができません。また、投稿論文数が多い場合や専門性の観点から、編集会議の判断により、投稿論文を受理した後に、専門査読委員以外の会員にその都度査読を依頼する「臨時専門査読委員」の制度も設けました。査読は、従来通り、投稿者と査読者の双方を匿名にしたまま行われ、編集会議においても、編集委員長以外の紀要編集委員には投稿者名を伏せたまま採否の審議が行われます。

(紀要編集委員会委員長／多賀太)

共同研究事業委員会から

「奨励研究基金・公募」のお知らせ

日本子ども社会学会・共同研究事業委員会では、40歳未満の若手研究者を対象に、学会の発展に寄与するような意欲的試行的な研究を行っていただくため「奨励研究基金」を設置しています（研究資金：個人10万円、チーム20万円）。研究テーマは、子ども社会学会の趣旨に適うものであれば限定しません。募集期間は令和2年（2020年）2月1日（土）～3月15日（日）です。奨励研究助成申請用紙に必要事項を記入の上、ご応募下さい。詳細は当学会ウェブサイトをご参照下さい。

（共同研究事業委員会委員長／香曾我部琢）